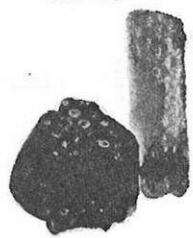




# 新春随想



## 武蔵と牧溪

松本雅明

宮本武蔵は細川忠利の招きによって、寛永十七年（一六四〇）五十七歳のとき肥後に入り、三百石で禄仕した。その古い伝記である「武公伝」「二天記」は、八代の臣豊田又四郎（二六七一—一七四九）が伝聞したものを、子孫が編集して安永三年（一七七四）にまとめたものである。

そのなかには武蔵の書画については、豊田家蔵の「戦気」の大字や、岩上鶴、自誓書にふれるにすぎない。彼の絵を新らしい視点から評価したのは幕末の華山や竹田である。彼の武道が再認識され、「五輪書」「兵法三十五ヶ条」「独行道」が問題になったのも、その頃である。その鋭利で雄渾な画風は、人々をして改めて画人としての武蔵を見直させた。

しかし彼の絵の原流がどこにあるかについては、種々の異論がある。あるいは海北友松、あるいは長谷川等伯に師事し、または矢野吉重と交友があったとしている。しかし彼には友松のもつ色彩感も、等伯の豊潤さも、吉重の装飾性もみられない。それらの描線とはほんらい異質的なものである。それは彼が二十九歳で佐々木小次郎を倒してから後の経歴が、香として判らないことにもとづく。いつ何処で、絵を習ったかもさだかではない。剣と禅との悟りがおのずから、余技としての絵をかかせる境地に達せしめた、と考えられぬこともない。しかし彼の画法にはたしかに独自の技法があり、それは数多い偽作には絶えて見られぬところである。その説明は、一定の技法の系譜を無視しては不可能で、それは雲谷派、狩野派、その他の傍流とも異なり、当時の日本の作家にないものである。

雪舟の伝統を強調する雲谷派は、つよいが抑揚のない描線を用いる。もっとも対照的で異なるのは狩野派で、障壁という大裝飾画面を扱うので、描線に人為的な強調が加わる。それは筆を強くいれて、中間で力をぬいて一気に引き、最後につよく筆を下ろしてはね返す技法である。それらは武蔵の絵には全くみられない。武蔵ははじめの力を抜いて筆を下ろし、しだいに中ふくらみに力を加えてゆき、最後にまたさりげなく筆をとめており、狩野派と全く対照的である。それは日本の他の作家には全く見られぬところである。

しかし中国に目を向けると、明らかにそういう筆法の人がいる。それは日本で東洋最大の画家とされながら、中国であり評価されなかつた南宋の画僧牧溪である。元末の夏文彦の「図繪宝鑑」には、「意志簡当にして莊飾を費さず」とあるが、他方「粗悪にして古法なく、誠に雅玩に非ず」という。そのために室町時代の日本に運ばれ、足利義満の所蔵目録「御物御画目録」には、全二五八幅中、牧溪は過半数の一三四幅を占めている。牧溪はその写実性のために中国に入れられず、真の知己を日本人に見いだしたと云える。

武蔵の筆法はこの牧溪のそれをもっともよく伝えている。すなわち大徳寺の「観音猿鶴」の三幅対、同「竜虎」の対幅、老子像、羅漢図をはじめ山水・静物などにみえる。中ふくらみの「みみず型」の線は、かなりよく武蔵の線と一致している。武蔵は細川家に禄仕する前に、京都の寺院で牧溪の画跡に接し、ひそかにそれを学んだにちがいない。そこに武蔵の絵に当時の日本作家にない特徴が見られる原因があると思われる。

しかし武蔵と牧溪には全く異質的な点がある。それは武蔵の睡（もす）や鶴の絵にみられる真剣を前にしたような鋭利さは、牧溪にはない。牧溪には深い秀潤さと、悠揚迫らぬ余裕と強靱さがある。それに比べると、武蔵の作には鋭さのあまり折れそうな雑、緊張のあまり切れそうな弦のまろさがある。その部分部分の緊迫性は小画面にはよく生かされるが、大画面、例えば「蘆雁図」のような屏風になると、生硬さと、構図の破綻をまぬがれない。これは彼の武人としての厳しい修業が生み出したものである。それは彼の絵に独自の雰囲気を与えとともに、画人としての余裕のなさを表わしている（松井家の達磨蘆雁の三幅対の如きは例外である）。

しかし彼が牧溪に学びその真骨頂に迫ろうとした気迫には、私はうたれないわけにはいかない。彼の作品は幕末までは、肥後以外にはあまり残っていません。いま全国にあるものは、その後離散したものである。従って、彼の現存の作品はほとんど晩年の五年間に肥後で画かれたとみられ、作品のうちに年代的な発展変化を跡づけることは、不可能にちがいない。

（熊本大学教授）



## お酒の話

緒方明子

女がお酒の話とは、おや？と思われるかもしれませんが、酒屋の女房でございますので酒を造る苦労、酒づくりの横顔、いろいろよく知っております。もっとも近頃は酒屋の女房ならずとも女性飲酒人口が非常に多くなっておりまして、酒屋の女房酒を語る、こんな事もお正月らしいかもしれません。ところでお正月には何処の家庭にも、かねがねはお酒を飲まないお家でもお酒の一本や半本はご準備をなさいますでしょう。

月々から考えてもまず一月の新春の酒、二月は雪見酒などになりますか。三月はひなの酒、四月は花を愛しむ酒、五月は男の節句や藤の酒、六月は雨休みの酒、七月暑氣払いの酒、八月これは盆の酒でしょうか。九月陰暦ですと重湯の節句、まあ月を見る酒になります。十月これも月のよい頃、秋はとにかくお酒の味の冴える頃になります。十一月は紅葉の酒、十二月これはもう寒さにもなり師走にもなり、慌ただしい中に、一年の苦労を忘れその間の愛憎の悩みを水に流し、又過ぎ来しこの一年に感謝の思いをこめて行く年を送りつつ飲む酒、それから又巡れば新年、という事になります。どうもこう書いておりますとお酒ばかりに明け暮れているように申し訳ございません。

酒屋ぐらしもすでに四分の一世紀をはるかに越す程になり、その間に酒造りの移り変りをよく見、楽しんでいた事もありますので、なつかしい風景が消えて行くのが惜しいように思うもの等も多くあります。

もともと手工業的になってみれば民芸的生産物といえましょうか、一人一人が心をこめて香りをきき、目で促え、手でたしかめ味わって造っていたものが、近年急激な企業近代化に伴い酒造りも急速に機械化されて来ましたため、昔ながらの酒造り風景というものは非常に少なく、味気ないといってしまうはそれまでですが、こういうものにも押し寄せるそれは時代の波というものでございましょう。

世界の国々それぞれにその国の酒があり、皆国土や民情の中に育てられた酒だと思えます。ライン川の流域は、ずっとずっとぶど